

伯耆国分寺・国分尼寺跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

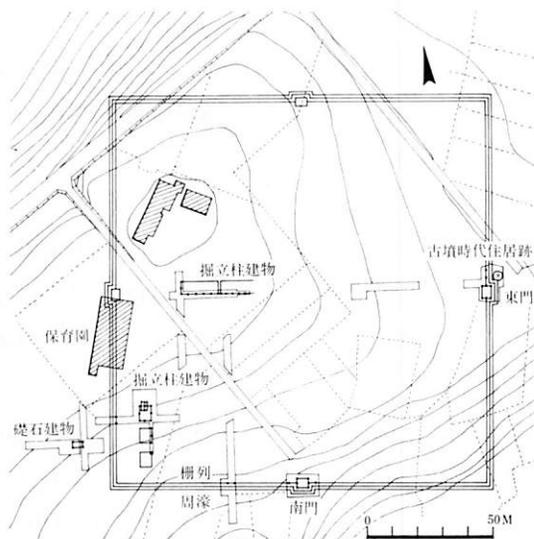
鳥取県倉吉市にある伯耆国分寺跡は、鳥取県教育委員会と倉吉市教育委員会が国庫補助金による継続事業として昭和45年から発掘調査を実施しており、これまでの調査で塔・金堂・講堂などの基壇を確認し、主要伽藍はほぼ180m四方の寺地の西寄り三分の一の線上に配置されていることがわかっている。本年度は国分寺の残余の部分と国分尼寺の調査をあわせた第3次調査を11月1日～12月19日にわたって実施した。宮沢・佐藤・天田が参加した。

国分寺は中門と回廊の一部、講堂北方地区、金堂西辺部、寺地の西方の土塁と空濠について調査した。西方土塁と空濠が推定どおりに寺の西を限る施設であることを認めたほかはいずれも調査した範囲では後世の攪乱が著しく、遺構の検出はできなかった。

国分尼寺については、天曆2年(948)に国分寺から発した火災で北接する尼寺が類焼した(続左丞抄)ことから、僧寺と尼寺が隣接してあったといわれていた。しかし一帯については特に寺跡をうかがうような形跡もなく、尼寺の様子は全くわかっていなかった。そこで今回は国分寺の北東方において尼寺の存在を確かめるための調査をおこなった。その結果南門・東門・倉庫建物・尼坊ふうの建物などの掘立柱建物遺構のほか、寺域を画する柵列・溝を検出し、寺地の規模もほぼ明らかにすることができた。南門と東門は同規模であり、正面1間(柱間16尺)側面2間(柱間5尺)の四脚門である。尼坊とする建物は寺地の中央西寄りに2棟あり、うち1棟は5×2間(桁行10尺・梁行8尺)の東西棟で、東側に接してある1棟もほぼ同規模と思われる。倉庫建物は西南隅近くにあり、一部確認のものを含めて4棟ある。うち1棟は2×3間(桁行梁行とも5尺)の総柱の建物で、他の3棟は2×2間(桁行10尺・梁行

8尺)である。寺域を限る溝(幅1.5m・深さ0.7m)と柵列(柱間10尺)は東・西・南の各辺について検出しており、東西の溝間距離が149.8mあるところから寺地は500尺四方であったとおもわれる。なお、このほかに尼寺以前の遺構として古墳時代住居跡1がある。

今回の調査では主要伽藍を明らかにするまでに至らなかったが、尼寺が僧寺の北東方に66m(220尺)を隔てゝある事実を両寺の寺域の関係においてとらえることができたのは大きな成果であった。(佐藤興治)



第1図 伯耆国分尼寺跡遺構略図